慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済的史観論の価値（六）
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.11 (1919. 11) ,p.1522(136)- 1528(142)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19191101-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

定權は全く共同的である。消費者の代表としての國家はギルド會議に於ける委員と同等の發言權を有たなければならぬ。過渡期に於てはギルドは其生産物の管理權を限定することは出來ないけれども其成熟期に達したナショナル・ギルド組織に於て彼等は其管理權を國家とギルドとの間に分擔しなければならぬ。

吾々は以上の所論を約言すべき所に達したのである。吾々の直接の政策は常に吾々の目的に依つて定められなければならぬ。然し乍ら吾々の主張する直接の政策がすべての場合に目的の一部となるものではない。過渡期にあつては成熟期に於て不用の管理權をも要求しなければならぬ。吾々は過渡期に於て資本家との共同行動を是認しなければならぬが、吾々の目的は資本家の絶滅にあるは言ふまでもない。同樣に吾々は勞働者の生産物管理權を過渡期に於ては求めるのであるが成熟期に達すればそは國家の手中に收めらるべきである。要するに吾々は現在に於て經濟的勢力を求めなければならぬ、何となれば經濟的勢力に依つてのみ吾々は其理想を實現し得ると思ふからである。（一九一九・九・四譯了）

經濟的史觀論の價値（六）

野村兼太郎

（八）

吾人はこゝに最後の問題に到着せり。即ち經濟的史觀論と精神的方面との關係如何の問題なり。

燦然たる希臘羅馬の文藝美術も、近世科學の驚嘆すべき發達も、果た又現代文明のすべての利器も、一として吾人の精神的作用の所産ならざるはなし。ルーテルは宗教革命を成就し、ナポレオンは全歐洲を慴服せり。一偉人の力よく世界の大勢を左右すること斯くの如し。精神力の偉大はよく今日の文化を致せり、大偉人の出現は歷史を形成す。匹夫も其の志を奪ふべからず況んや區々たる物質的要素は偉大なる天才の意志を如何ともなすべからずと。余は斯如く精神的方面を過大視する者にあらず。希臘羅馬の藝術も其の物質的經濟文明を外にして成立することを得ず。ルーテル、ナポレオンも其の時代を離れて存在せず。露西亞の文豪トルストイが其の著「戰爭と平和」とに於て、ナポレオンの覇業も時代の力、運命の力に依れるに過ぎざることを描けるは又一面の眞理を語るものなり。吾人の精神力如何に偉大なりと雖も客觀的事象の盡くをば動かすこと能はず。然らば吾人の精神力は文化に對して如何なる程度の貢献をなすや。

すでに述べたるが如く吾人は他の動物と異りて自然的本能的要求以外に理想的自由意思的要求を有す。ベルグソンは其の「創造的進化」に於て云ふ。「本能は特種の物象を端的に其の實質性其の儘に把促す。「是は是なり。」とするが本能なり。然るに叡智は具體的なる個々の物象を把促せず。必ず一物を一物に、若しくは一部を一部に、若しくは一方面を一方面に關係さする自然力に外ならず。故に叡智は「是は是なり。」と云はずして「若し爾々なりせば斯々ならざるべからず。」と云ふ。第一種の智識は定言命題の公式に屬し、第二種の智識は常に假設的なり。而して此等二種の能力中動もせば前者は遙に後者より優れたるが如く見ゆ。事實若し此の種の智識にして無數の物象に適用さるゝことを得ば、そは確實に後者よりも優れたるべし。然るに事實に

於て此の種類の智識は或特種の物象、否其の物象の特種なる部分にのみ適用さるゝに過ぎず。此の特種なる物象若しくは特種なる部分に就ては此の智識は完全にして充實せり。之に反して叡智てふ能力に依つて得らるゝ智識は單に皮相的にして且つ不充分なる智識に過ぎざれども、此の種類の智識は無限の物象に適用することを得。」(1)斯如き本能はすでに述べたるが如く、すべての生物盡く是を有し、是に依つてよく「自己保存」を全ふせり。ベルグソンの所謂叡智なるものは單に人類にのみ局限せずして、高等動物は是を有せりとなせり。然乍ら其の最も發達せるものは人類に外ならず、これ又人類が他の動物よりも優れたりとなす所以なり。斯如き叡智の世界はかの本能的衝動の世界と異りて意識的なり。馬蚍が其の卵を馬の脚肩等に產みつくるは其の馬の身體を舐め幼虫が其の胃の中に成長することを豫知してなせる行爲にあらず。全く無意識的に卵を產むこと、恰も日向葵が太陽を追ふて廻るが如し。之に反して吾人が田圃を耕作し、勞働に從事するは、前者の如き無意識行動にあらずして、自己の行動を明確に意識せり。此の自己の行動を意識することは如何なる行動が最もよく自己の周圍に適應するかを思考するに至る。換言すれば如何に行動せば最もよく「自己保存」若しくは「自己主張」を全からしむることを得るやを考ふるに至る。斯如き場合勿論吾人は主觀が客觀を從へると思考するなり。客觀的對象界は吾人が是れを意識すると否とを問はず、それ自體に何等變化あるべき筈のものにあらず。然れども吾人が此の客觀的對象界を意識するてふ事實は、單にある客觀的對象をそのまゝに受け容るゝ以外に斯如き知覺現象を吾人の主觀的判斷作用に照合して、如實の現象をして變化あらしむる意思を有す。而してこゝに意思對象の世界を有す。吾人が種々なる行動の中より、本能に依る以外に、自己保存若しくは自己主張に最も適當なりと思惟する行爲を選擇し得るは斯如き意思の存するが故なり。然乍ら今こゝに斯如き意思の內容を明確にせんとするは極めて容易ならず。唯選擇的判斷を下す斯如き意思はそが理性的に自由ならざるべからず。即ち自由意思の存在は人類が如何なる場合にても少くともそが意識的に選擇的判斷を下さんとする限り其の前提として存在せざるべからず。これ馬蚍や「ツエルツエリス」蜂の行動が選擇を必要とせざる本能的なるに反して、人類のある行動は選擇を必要とする自由意思的のものなり。勿論すでに述べたる如く人類にも本能的方面存在せり。然れども人類をして現在の文化迄進步せしめ、更に將來の發展を期待し得るは、人類が本能的生活以外に自由意思的生活存するが故なり。自由意思とは元來一般に內的にも外的にも因果律より獨立せる意思を意味す。(2)個々の意欲 Wollen 及び行爲が前述せる自然科學的因果律に依つて羈束されず、何等定命的規範に從はずしてなさるゝを云ふ。然れども自由意思はこれを放恣 Willkür とは區別されざるべからず。如何なる點に於て自由意思と放恣とは區別し得るやと云ふに、自由意思は吾人が何等かの標準を以つて數種の行爲の內より其の目的に達して最もよしと判斷せる行爲を選擇するものにして、放恣の如く何等の標準なく其の時其の場の思ひ付きに依つて行動するものにあらず。此の點に於て自由意思と雖も常に一の目的に束縛せられざるを得ず。即ちこゝに必然性を有する個別的因果律存するなり。斯如き目的はすでに述べたるが如く文化價値に外ならず。吾人は

少くとも其の行爲にして價値あらしめんと欲する限り、其の經濟的行爲たると藝術的行爲たると其の他如何なる行爲たるとを問はず、尙ほ又各人間に多少の程度の差異ありとするとも、必ず斯如き規準に束縛せられざるを得ず。唯吾人の叡智の多少、能力の如何等に依つて誤つて――自身は其の誤謬を意識せずして――價値なき或ひは價値少なき行爲をなすことあり。斯如き意味に於て人類の行動は定命的ならず。然れども其の行動が價値關係に依つて是認せらるゝ時は必ず必然性を伴ふ。

然らば斯如き自由意思の世界にあつて、吾人は如何なる環境を理想とするや。自由意思はすでに述べたるが如く理性的たるべし、少くとも感情を以つてする時は其の判斷の正誤は暫く置くとするも、そは直觀的にして衝動的なり。然るに意思的考慮は斯如き感情の發作に基かずして、理性的判斷に從ふものなり。人類の行爲中外界より受動的に承けたるものにあらざる限り意思的判斷をなさゞるものなし。かの藝術的作品の如き、藝術家自身の感受性はそが直觀的にして衝動的なりとするも、藝術家が再び是を何等かの形式に表現せんとする時は、あるひは意識的にあるひは無意識的に、意思的判斷を下さざるを得ず。況んや哲學者思想家科學者等に於ては、假令問題の解決を暗示的に直觀に依つて得るとするも、それを精確に記述せんには意思的判斷を待たざるべからず。之を要するに若し人類にして衝動的本能的才能のみを有し、意思的理性的才能を欠きたらんには今日の進化は見ることを得ざりしなるべし。意思的才能はすべての行動をして文化價値の實現に貢献あらしめ、而して是が周圍の事情は出來る限り個性を充實せしむるにあり。本能的生活にあつては重に「自己保存」の滿足にあり、意思的生活にあつては更に「自己主張」を充實せしむるを必要とす。換言すれば各個人の天賦の才能を充分に發揮する環境を理想とす。

人類の精神的要素は是を求めて本能的衝動的方面にも得られざるにはあらず。例へば藝術的靈感の如き其の優なるものとす。然れども多くの衝動的精神要素は周圍の事情物的境遇に支配せられて發作す。所謂靈感 Inspiration の如きも斯如き靈感を起さしむる環境を必要とするにあらざるか。勿論斯如き靈感を受け容るゝ才能を必要とすれども、又外的條件のよくそれに順應せざるべからず。同一物の月を見ても、或る時は喜び、或る時は悲しむ。そは恰も彼自身の精神狀態に依つて客觀的事象を異ならしむるに似たり。然れども彼が喜ばしと感じ悲しと思ふは單なる精神の作用にあらず、これを感ぜしむる何等かの客觀的事實に依れるのみ。之を要するに感情的行動は時に何等の判斷なく衝動的に出づると雖も、こは人類の本能的作用が其の外的客觀的事象に從つて惹起さるゝに外ならず。斯如く云ふともそは感情を輕視する者にあらず、一方前述せる如く人類の本能生活の重要なると共に、感情の鋭敏なる者は一般普通人の感得し得べからざる世界を感知し得るが故なり。

更に自己の身命を棄てゝ他人のために盡す事實を間々聞知す。斯如き事實は多くの場合に於て發作的衝動的なり。其の衝動的なる場合にも無意識的に危難に遭遇せる他人を救はんとす。そは時に自己の實力をも顧慮せずして相共に難に殉ずることあり。斯如き行爲は自ら自己の良心に問ふて疚しと感ずることを假令無意識的なりとも恐るゝが故なり。自己の良心に問ふて疚しと感ずるは自己主張の未だ不充分なるがため

なり。尙ほ此のことに關しては後節說く所あるが故に多くを論せざるべし。

次に自由意思的理性的方面に於ける精神的要素如何。本能生活に於ける吾人の行動の大部分が物質的要素に左右さるゝこと極めて大なること第四節に述べたるが如し。今理性的生活に於ける吾人の行動を見るにすでに述べたるが如く生存的本能は其の衝動性を脫却して、冷靜なる意思判斷に入らんとするなり。所謂マーシャルの熟慮的(3)の境界に入らんとするものにして、人類文化の根本たり。斯如き境地に於ける特徵は相互間に於ける冷靜なる理解なりとす。歩一歩より高き文化を建設せんには其の目的價値を基準として自由意思に依る選擇を必要とす。充分なる理解を來たすには、時に是等無理解者相互間に於ける激烈なる衝突を必要とすることありと雖も單に衝突するのみにては理解し能はず。衝突後交互に充分に冷靜なる判斷を必要とす。即ち本能に驅られて盲動するのみが人類本來の面目にあらず、其自己保存も自己主張も理性的判斷を待つて始めて價値を有し、社會全般相互の理解も完成することを得るなり。（未完）

（註一）Bergson:—"L'evolution Créatrice." pp. 147-148.（金子馬治氏譯「創造的進化」二七二——二七三頁）

（註二）Eisler:—op. cit.

（註三）Marshall:—op. cit. p. 6.

同盟罷工の原因に關する疑問

根本清六

一

最近本邦に行はれたる同盟罷工を概觀すれば大正三年度に於ては罷工件數五十、參加人員七千九百四、大正四年度に於ては罷工件數六十四參加人員七千八百十三を算したりしが、大正五年度に於ては一躍して罷工件數百八を示したるにも拘はらず、參加人員は八千四百十三に止まれり、而も、翌大正六年度に入りては罷工件數三百九十八、參加人員五萬七千三百九に激增し更に大正七年度に至りては罷工件數四百十七、參加人員六萬六千四百五十七に上れり、これを合計すれば罷工件數一千三十七、參加人員十四萬七千八百九十六を示せるが、本大正八年度に及びて罷工件數と參加人員とが、驚く可き數字を日々に加へつゝあるは世人の周知する所なりかくの如き事象が久しきに彌りて繼續するのみならず、漸を追ふて擴大せむとするの狀を望見して、世間の多數者は那箇の心を以て、これに對しつゝありや、換言すれば、國民經濟の總勘定より立論して、かくの如き事象を以て果して慶す可しとなすか、將た又吊す可しとなすか、兎も角も、事の長へに無解決の狀に放任せらるる可きものにあらず、又、放任す可き性質のものにもあらざるのみならず、速に案を具して解決の途に就かしむること、極めて緊切の要務たる可しと雖も、吾人は玆にその原因に遡りて、一個の疑問なき能はす、乃ち、同盟罷工の直接原因としては、晩近に於ける物資價格の躍騰と、これに附隨せる生活困難とを擧くること、殆むと凡ての人々の間に一致し、恰も說明を要せざる明白の事理たるが如き觀ありと雖も、亦、世間には同盟罷工の結果として、想外なる賃銀の增額を收得し、これを擧けて必要なる範圍を超越せる方面に浪費し、毫も消費經濟上の節制なきもの尠からず、これが爲めに却て物價騰貴を誘致するの一因たらざるなきや疑なき能はず、果して然らば、物價騰貴を理由として發動した